
もし、トリステイン魔法学院に《漫画 ナポレオン～獅子の時代～》の単行本が落ちていたら

野良衛門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もし、トリステイン魔法学院に《漫画 ナポレオン》獅子の時代
《》の単行本が落ちていたら

【Nコード】

N4012N

【作者名】

野良衛門

【あらすじ】

内容は題名通りです。

「グラン・ダルメ
大陸軍は！」

「世界最強オオォー！」

「幸せ発見器は！」

「史上最高オオオー！」

「ルイズの爆発は！」
エクスプロージョン

「世界最凶オオオー！」

プロローグ（前書き）

少し遊びのつもりで書きました。短めですが気軽に読んで下さい！
感想、評価、ポイントを是非ともお願いいたします。

プロローグ

ある日の朝だった。才人は、トリスティン魔法学院にあるヴェストリの庭を散歩していた。魔法学院でルイズ達が卒業するまでの間の最後の日々を送っていた。

もう地面が浮き上がることに恐怖で怯えなくていい。ルイズやティファニアの力（虚無）を利用しようとする教皇やジュリオ達の事を考えなくていい。平和になった事を実感していた。

ただし、魔法学院に戻った才人達にあのエレオノールからお達しが出ていた。

才人は男子寮に部屋を借りること。

ルイズ、シエスタ、タバサ、ティファニアは夜、才人の部屋への出入りを禁止。当然才人からも行くことが出来ない。

タバサの韻竜も入ることは出来ない。

シエスタはメイドとしての用事は昼間に行う事、その間才人は部屋に入ってはいけない。

才人はそれぞれの部屋に行く時は一人では行かない。

もし守らなければ一晩中エレオノールから淑女としての『教育』が施されることになっていた。

「やっぱり、慣れないよなあ。ルイズやシエスタと寝てたことはすぐ寝つきもよかったんだけど、落ち着かないな」

才人は一人でぶつぶついながら歩いていた。

突然、石畳の道の前方が神々しく光が広がった。

「うわっ！眩しい！何なんだ？」

反射的に目を瞑り腕をかざして光を遮ると急速に光が消えた。すると目の前の石畳の道に段ボールが落ちていた。

「うわ、あれは段ボールの箱だ！」

才人は段ボールを見て『地球世界』でいつも見ていたありふれた物だったが、それすら新鮮に移っていた。

才人は素早く駆け寄ると段ボールに貼ってあったガムテープを慎重に剥がし、箱の中を開けた。

中には本が入っていた。表紙を見ると知っている漫画だった。

「こいつは『ナポレオン』じゃないか？懐かしいなあ。長谷川哲也先生は確か『北斗の拳』の原先生のアシスタントしてたから絵が似ているんだよね。だいたい、肖像画のナポレオンは格好よく英雄らしく描かれているけど、こんな態度と目付きの悪いナポレオンなんか長谷川先生しか描けないもんな。」

フランス革命ってどうしてもイメージ的に『ベルばら』みたいな少女漫画や宝塚歌劇団のような美しく書かれていることが多いけど、実際は血生臭くって人がいっぱい死ぬんだよな」

才人は『地球世界』では結構ネカフェ通いもよくしたせいかな、漫画には一家言あった。近くにあったベンチに段ボールを持って行くと座って黙々と漫画を読み出した。

「きゅい！きゅい！大変なのね！大変なのね！お姉さまに報告なのね」

朝から才人が男子寮から出て行くところを発見して付けていたシルフィードは、タバサに千載一遇のチャンスが来たと思い、さっそく起こしに御主人様のいる部屋へと急いで向かった。

第1話 秘密の日本語教室（前書き）

ホントお遊びで書いてますんで深く考えず楽しんで下さい。

第1話 秘密の日本語教室

最近放課後、宮庭（敢えて隊士達はそう呼んでいる）から大きくて、奇妙な掛け声が聞こえてくる。水精靈騎士隊が訓練の前に変と言うからバカと言うか、女子生徒に言わせれば、

『滑稽極まらない掛け声 《モンモランシーの感想より》』が聞こえてくる。

女子生徒達は最初、少しだけまた女子風呂覗き事件のみたいな、ヘンな事を考えていると思ったが誰も口にはしない。彼らにはガリア王継戦役以来、赫々たる武勲がかもしれだすモテモテオーラがフィルターとなって深くは思われてはいない。

隊士達が隊列を組み始めた。今日はマリコリヌがやる気満々で隊士達の前に立った。毎回隊士達は順番で前に出ている。

「なあ、サイト」

「どうした、ギーシュ」

ギーシュは才人に声をかけると髪の毛をさわりながら、複雑な表情を見せていた。

「やっぱり、やめないかね？アレ」

才人は自分にも思い当たるせいか、考えてしまう。

「自分が前に出てやる時はいいけどやっぱり恥ずかしいな」

「まあ、誰も迷惑がからないし、やった後、訓練に気合いが入るからな。ギーシュ、今さらカッコつけたいのか？」

才人はそんなことわかっているだろと言いたげだ。戦いには見栄も外聞もない。気合いを入れないと生き残れない。

「いやなに、ちょっと言いたかっただけだ」

「でもいやじゃないだろ」

そう言われると少し恥ずかしげに背けた。

ギーシュの肩をポンと叩くと二人は隊列に並んだ。

マリコリヌは、最近までルイズの長姉エレオノールやブリジッタに罵られるのが性癖と化したいけないぽっちゃりさんだったが、戦いが終わり自分でも思うところがあるみたいだ。彼もこの声だしが気に入っている一人だ。

「では、訓練前の恒例の『声だし』を行います。行くぞ！」

「おおー！」隊士達が鯨波をあげる。

「俺達は何だ？！」

「水精霊騎士隊！」
オンデイナー

「水精霊騎士隊は！」

「ハルケギニア一ッ！^{イチ}」

いつもここはわざと間違える。見ている女子生徒からは何で間違えるか理解出来ない。

「違うッ！こうだッ！^{オンデイヌ}水精霊騎士隊は、ハルケギニア最強オオオオ
ー！だ！」

「水精霊騎士隊はッ！」

「ハルケギニア最強オオオー！」

「水精霊騎士隊はッ！」

「ハルケギニア最強オオオー！」

「水精霊騎士隊はッ！」

「ハルケギニア最強オオオー！」

大きな鯨波をあげると隊士達の瞳にもスイッチが入ったように気合いが入った。

「今から1対1の訓練を行う。行くぞ！」

「おおー！」

隊士達は広がって間隔を取ると杖を抜き、魔法をかけてサーベル状に変形させた。

もし、タバサがあの時、忠告してくれたから、弛みきってしまつて、油断していただろう。平和になったからこそ気を付けなければ。前は元素の兄弟に遅れをとったけど、やっぱり油断しちゃいけない。もうタバサを傷つけたくない。シエスタを悲しませたくない。ましてやテファの『わたしを殺して』なんかはもつてのほかだ。そして、ルイズ、もうお前とは離れたくない・・・。

才人は自分を遠くで見ている女の子達を見ていた。

別に何股とかじゃなく純粹にそう思っていた。だが、あの漫画がとんでもない騒動を起こすとは思ひもよらなかった。

〈3日前の朝〉

才人は1巻のアウステルリッツ会戦を読み終えた。現代世界の軍隊がハンニバルがローマ軍を完膚なきまでに叩きつぶした包囲殲滅戦の名高いカンネー会戦と同じように教科書にしているアウステルリッツ会戦。

この本の作者は戦争の凄まじさ、沢山の人が死んでいくシーンをこれでもかと表現している。ダヴーが至近距離で敵と大砲で打ち合うシーンなんか、ホント?と思わせる描写だったり、ナポレオン自ら兵隊達に鯨波を教えて気合いを入れるシーン『大陸軍は世界最強オオオー!』なんか長谷川マジックの一端が見られ、つつい引き

込まれていった。

「サイト」

サイトは呼びかけられても本を貪るように読んでいた。

「サイト！」

今度は体を揺すってきた。

「うわぁッ！」 軽く揺さ振っただけなのに才人はベンチに背もたれがない為、後ろにひっくり返って地面に倒れこんだ。

「ごめん。大丈夫？」

「痛たたた〜」

才人は腰をさすりながら立ち上がるとタバサが目の前にいた。

「いっつつ、タバサ、おはよう。今度呼ぶときは優しくしてくれ」

「呼びかけても気づかなかったから揺さ振った」

確かにあなたの言う通りです。

「タバサ、早いな。いつもはまだ寝てるだろ。なんでここに」

「あなたが面白いものを拾ったってシルフィードが教えてくれたから」

才人は段ボールから漫画を取出しタバサに見せた。そして寝れなくて散歩していたが石畳の道を歩いていたら突然光り出してこの箱が落ちていた。中を空けると本が入っていて自分の世界にあったものだった事。懐かしさのあまり漫画をついつい夢中になって読んでしまったことを話した。

タバサは黙って聞いてくれた。

タバサは1巻を見るとパラパラと読み始めた。

「これ、何て読むの？」

見るとナポレオンが例の掛け声を兵士達に教育しているシーンだ。

「これは、『違う、こうだ！^{グラン・ダルメ}大陸軍は！世界最強オオオー！だ』って言っているんだ」

タバサは、少し考えてから、才人をお願いをした。

「あなたの世界の言葉を教えて欲しい」

「ああいいよ。前にお前にガリア語教えてもらったしな。でも読めたからって何の役にも立たないぜ」

「いい、構わない。毎朝、今の時間にここで待ち合わせして。それから、これからここで教えるときだけは私のことエレーヌって呼んでほしい」

タバサは恥ずかしい気持ちを押さえて才人に精一杯の願いをした。最後のほうはうれつが回らないようになりかけた。

「ああいいよ。なんか俺達の世界の事に興味を持って貰って嬉しいな」

才人は単純にタバサの申し出に喜んだ。

タバサは咄嗟に思いついた作戦がうまくいった事に喜んだ。これなら、エレオノールが定めたルールには抵触しない。今はどんな形にせよ二人つきりになれる事が大切だ。

正直、ルイズと才人の絆の深さは認識している。決して生涯離れないだろう。だからルイズに間違えられてもいいからキスしたいと思っていた。でも少しでもいいから間違えでなくに自分とわかって欲しい。彼女の小さな野望の第一歩がここに記された。

第1話 秘密の日本語教室（後書き）

次回、シエスタ、マツセナ犬発見す！

第2話 ド・オルニエール体制（アンシャン・レジーム）の崩壊（前書き）

お待ちせいたしました。ご感想、評価、ポイントを是非とも願います！

第2話 ド・オルニエール体制（アンシャン・レژیム）の崩壊

朝、早く目覚める。もう習慣になった。段ボールの箱から何冊か手にする。小1時間だけ、俺は家庭教師になる。窓を開ける今日はいい天気だ。深呼吸をした。気持ちいい。もうすぐ、生徒が来る。フライの魔法で蒼髪の眼鏡をかけた小さな女の子がやってきた。

「オハヨウゴザイマス。ミスタ・ヒラガ」

「オハヨウ。エレーヌ」

片言ながらお互いに日本語で挨拶をかわした。タバサにとって至福の時間がやってきた。

この授業を受けてから今までモノクロの風景がカラーに染まり、木々の若葉まで美しい。少しだけ他の3人より前に進んでいる錯覚を起こしそうな気がした。

実際はそうではないけどこの空間、この時間はわたしだけが知ってる才人なのだ。

何故、庭でする予定が才人の部屋になったのは雨の日どうするかだった。タバサもお願いをするのが精一杯で肝心なことは忘れていた。後で考えれば最もだった。

「いいよ。よくよく考えたらそうだもんな」

才人はタバサの提案にあっさりと頷いた。

今日もガリアとよく似た国であるフランスを才人の国の言葉を覚えながら夢のような朝を過ごした。

「サイト、この本は、他の人に見せちゃだめ」

突然のタバサの言葉に才人は、戸惑いを隠せなかった。勉強を初めて3日がたち、フランス革命の話になる2巻の話になった時だった。

「ハルケギニアでは平民が王朝を倒すことはあつてはならないの」

「どうしてだ？貴族たちは平民に対して好き放題じゃないか？」

「でもここ数十年、早魃が起こっても餓死者は出ていない。平民達は飢える程、困っていない。ハルケギニアにはアメリカのような植民地もないし、7年戦争などのような長期で大規模な戦争もない。トリステインは財政が大変だけどこの当時のフランスと比べたらかわいもの。ハルケギニアを見渡してもここまでひどくない」

「・・・そうだけど」

「モンテスキューやルソーのような思想は立派だけど、ここでは受け入れられない。ブルジョワジーのような貴族と平民の間のような身分もない。ミラボーも言ってる。王を処刑すれば各国から秩序を乱す者として討伐されることになる」

才人は黙ってタバサの話聞いた。

「サイトもわたしの伯父が死んだ後、トリステイン中の貴族から命

を狙われたことがあったでしょ。エルフとのことでもあなたはルイズやわたしたちの為に命を賭けてくれた・・・」

才人はタバサの顔を見た。悲しげに蒼い瞳に涙を溜めていた。

「あなたは確かに強い。でもこれ以上、敵を増やさないで。もう、あなたを失う怖さを味わいたくない・・・。だから、約束して・・・」

「

タバサの言う通りだ。これ以上、敵を作っても何の益にもならない。

「ああ、わかった約束するよ」

タバサは泣き笑いで頷いた。

「ミス・ヴァリエール、最近、ミス・タバサとサイトさん怪しくないますか？二人で目だけで会話してるし、解り合っている感じがしますわ」

一方、才人が最近出入りしなくなったルイズの部屋でシエスタがルイズに話しかけた。丁度、ルイズの部屋の掃除が終わり、小さなお茶会というか子どもを連れた母親がマクドナルドでダベっているようなノリで紅茶とクッキーを愉しみながら話していた。

もつとも、二人ともマクドナルドなんて知る訳がないし、子どもの横で行儀悪くタバコをスパスパ吸うことはない。

「別に気にすることないわ。あの子、バカ竜がいなかったら大して心配する事ないし。それに単独であの子はヘンなこと出来ないから大丈夫よ」

ド・オルニエールの才人の屋敷で繰り広げられてきた才人を巡る微妙な攻防でタバサの動きをルイズは看破している気になっていた。ルイズはむしろ気になるのはティファニアの事だった。才人とティファニアがド・オルニエールでエルフ達に攫われてからサハラに自ら乗り込んで再会するまでの間が妙に引っ掛かるのだった。

その間、ルクシャナの婚約者、今は結婚したらしいがアリーと才人が戦って才人が勝つたらしい。あのエルフの強烈な魔法をどうやって避けたのか、いつもは冗舌に話す才人がところどころごまかしているような気がするからだ。スリーピングクラウド催眠術よりも強烈な催眠魔法をかけられながら、しかもあんなデカイ水竜相手に（ルイズは後にアンリエッタの特使としてネフテスを訪問した際、シャッラルを見せて貰った）よく勝てたと思った。

はつきり言ってアリーはルクシャナに振り回されて可哀想な人だけど自分やタバサを簡単に屠る力があり騎士は騎士なんか消し飛ぶくらい強力なのだと思ひ知らされたのだ。

『眠りそうになったときテファが敵を引き付けた隙を突いた』

才人がそう説明したがその時テファが妙に恥ずかしげで顔を赤らめてたかわからなかった。ガンダールヴは魂の震えがあればこそ力を発揮する。主人がいらないのに何故、力が出るのか疑問だった。

ルイズに妙案が浮かんだ。これなら、自分が思っている疑問やタ

バサの最近の動向を掴む事が出来る。

「シエスタ、あなた、サイトの部屋を掃除している間でもいいから、なんだかんだ理由をつけて『ボロ剣』をここに持って来て」

「デルフさんをですか？才人さん、デルフさんが前より小さくなっ
たおかげで最近、肌身離さずって感じだし、難しいですわ」

「だからこそなのよ。サイトが何をしているのかアイツに聞くのが
一番手っ取り早いわ」

ルイズの言葉にシエスタは何かを決意したように頷いた。

ルイズの言葉に頷いたもののシエスタは才人からデルフリンガー
を預かることが出来ずにいた。大きな剣から日本刀に変わり才人が
離さないのだ。

才人がルイズと一緒に授業に出ている間、シエスタは才人の部屋
にいつも通り掃除にやってきた。当然、デルフリンガーはない。

「ハフウ、どうしたらサイトさんからデルフさんを預かればいいか
難しいですわ」

一通り才人の部屋の掃除を終えたシエスタは両手を広げて大きく
伸びをしながら形のよい眉をハの字にしながら困った顔をした。

シエスタは才人のベットに寝転んだ。そして才人の枕に顔を埋めた。彼女が数少ない残された贅沢だった。この瞬間、自分が彼を身近に感じる事が出来るが同時に悲しくなる時でもあるのだ。

シエスタは、才人がルイズへの気持ち揺るがないことは知っている。ルイズも同様だ。とても自分が割って入れることは出来ない。タバサだってわかっているはずだ。今は二人で何をしているかはわからないがあゝの二人には適わないことくらい……。エレオノールの命で才人と一緒に寝れなくなり、魔法学院のメイドの寮に戻って一人部屋でシエスタは泣くことが多くなっていた。

自分が才人から離れることが出来るか？ 想像しただけで涙が止まらない。かといってルイズを恨む気にはなれない。才人を好きになることはルイズの事を多く知ることになった。あの好きさ加減はアルビオンの時、絶望のあまり自殺しようとしたくらいだ。自分以上に才人なしでは生きられない人。あとから聞いた話だがロマリアが汚い取引を持ちかけ才人を元の世界に還す替わりに聖戦に協力させられたのだ。普段は聡く誇り高い高貴な少女なのに自分の命を投げ出してまで守ろうとする男の子の前では彼のことしか考えられなくなるのだ。それでいて自分に対して女同士で張り合うことはあるが、身分の壁を超えて互いに認め合っている。

二人の事は認めているが自分の気持ちをこれ以上押し殺したくない。

ふとシエスタは枕から顔を上げると例の段ボールの箱が戸棚の上にあるのを見つけた。なんだろうと椅子を戸棚に近付けてた。椅子をのぼり、戸棚にあった箱を下に下ろした。中をあけると本が十何冊が入ってあった。本を見ると絵だけのページばかりで文字はあるが自分が習った文字ではなかった。

（何か不思議な本だわ）

箱の中を見るとページの角が折り曲げられた本があった。シエスタはその本を取出し折り曲げられたページをめくった。

（これは何と言う・・・不謹慎な。ふ、不謹慎の極みですわ・・・）

そこには偉そうな男の人が下半身をむき出しにした女の人に鞭で打たれている絵だった。しかも男の人は首輪で繋がれていて嬉しそうに打たれているのだ。さすがにシエスタはバタフライ伯爵夫人シリーズですら見たことがないシーンに驚いた。

「サ、サイトさんがここまでいやらしい事を考えているとは思わなかったわ」

実は才人はまだ全部よんでいたわけではなかった。7巻のマッセナが犬となって男装の女性と愉しんでいるページを折り曲げてもいなかった。前の持ち主が折り曲げていたのだ。シエスタは誤解した。しかもどうしようもないくらいに。

「確かにミス・ヴァリエールは出会った頃、サイトさんを乗馬鞭でサイトさんを叩いていたわ。でもアレはミス・ヴァリエールの性癖ではなかった。むしろ元々は、メイドの午後でさえまともに読めないくらいうぶなのだ。でもサイトさんを目覚めさせてしまった。そんなサイトさんを受け入れられるのはわたししかない。ミス・ヴァリエールはサイトさんの性癖を知っているが理解して受け入れられないわ。さらにうぶなミス・タバサではなおさら無理だわ。わたしがサイトさんの性癖を鎮めて差し上げなければ。そんなサイトさんを受け入れられるのはわたしだけ・・・」

その日シエスタは才人を『鎮める』べく準備の為、才人に別の理

由で暇をもらいトリスタニアへと向かって買い物をして準備を整え始めた。

一時期繰り広げられてきたド・オルニエールでの攻防はエレオノールの強権発動により鎮静化したのが、ついに均衡が崩れようとしていた。ルイズ、シエスタ、タバサ三者の均衡がそれぞれの思惑と行動により、崩壊過程へと突入していった。

第2話 ド・オルニエール体制（アンシャン・レジーム）の崩壊（後書き）

次回、シエスタ暴走？そして幸せ発見器ティファニアが重大な決意を持って・・・。

ちなみにUー15な内容になりません。

第3話 「勇気が！常に勇気が！さらに勇気が必要なのだ！」（前書き）

読まれたら感想、評価、ポイントを是非ともお願いします！

第3話 「勇気が！常に勇気が！さらに勇気が必要なのだ！」

シエスタは覚悟を決めた。既成事実の積み重ねで才人と関係を結ぶ。この一点に絞った。

タバサは才人と親しげにしているが、いつまで立っても清い関係は変わらないと踏んでいた。あの本の事でシエスタは才人の性癖を見抜いた気でいた。

（ミス・ヴァリエールはサイトさんを愛していてもサイトさんの性癖を満たす事は出来ない。

出来るのは、わたししかティファニアさんだけ、でもティファニアさんにとってサイトさんはおともだちに過ぎない。この計画を成功させればミス・ヴァリエールも無視は出来ない。

たとえば、ミス・ヴァリエールに本妻を譲っても・・・）

トリスタニアでシエスタは、雑貨屋で自分に合いそうな元ガリア空軍貴族士官の軍服とレースのパンツ、そしてジェシカに頼んで眠り薬^{ポーション}を手に入れた。

ジェシカからは『惚れ薬にしないの？』と言われたが妙な自信からいらないと宣言した。

魔法学院に帰ったシエスタはさっそく軍服を自分に合うようにさっさと仕立てた。決行は明日だ。

「デルフさんにはミス・ヴァリエールを引き付ける囿になってもらいますわ。後は計画通りに行けばサイトさんは明日からはわたしなしに生きれなくなるわ」

だが、シエスタには眼中にない人物が一人いた。

ティファニアだ。戦争から帰ってきた。彼女は一人悩みを抱えていた。

才人の生まれた国でよくあることで表現すれば例えば、会社の同僚の彼氏が自分の仕事で助けて貰っているうちに恋愛感情が芽生えてしまう。自分ではいけないと我慢をして、彼氏からわざと離れようとしても、彼氏は親友の気持ちを知らずに彼女の親友だからと近づいて来て、親友の心を揺さぶり、どうしようもなくなってしまふ。そして、ついに親友に悪いと思いつつ彼氏を誘惑して寝取ってしまふという筋書きだ。

ティファニアはそうなる手前で踏みとどまっていた。

ある日の朝、ティファニアは早く目が覚めた。窓を開け大きく深呼吸した。今日もいい天気だ。大きく背伸びをして胸にある彼女の最大リーサルウェポンの武器を大きく揺らした。

彼女には才人を繋ぎ止める事が出来てなおかつ、ルイズと才人の間に割り込むことが出来るもの。才人だけが使える通称『幸せ発見器』だ。だが彼女はこの時点まではこの2つの『幸せ発見器』についてコンプレックスの1つに過ぎない。

窓から覗くといつも風景に過ぎなかった。そこに蒼髪の少女が『フライ』の魔法を使って才人の部屋の窓に入って行った。

ティファニアはタバサと才人の様子をジッと見ていた。時折、タバサに楽しそうな笑顔で才人と会話している。才人に寄り添うように本を読みながらタバサがうっとりとした表情で才人を見つめていた。

ティファニアの中の何かが弾けた。

（あの娘サイトは譲らない！）

ルイズなら未だしもタバサがルイズとのことを知っていて才人の事を進めようとしている。あの黒髪のメイドのシエスタも未だに才人を諦めていない。いくら恋愛に鈍い自分でもわかることである。才人にとってルイズが一番である事は間違いない。かつて自分の母がそうであったように次がわたしなら・・・。

嫉妬深いルイズはかつてアンリエッタとキスした才人を許したではないか。

（あの時だってルイズを守る為なら燦然と左手を輝かせて守り抜いたあの手がわたしを守る為に輝かせてくれた・・・）

才人が聞いたら苦悩しつつ苦しげに否定しただろう。しかし、ティファニアはそんな事を考えずに拡大解釈しまくっていた。

ティファニアの『おともだち』は『おともだち（最愛の人）』へと確変する。

ティファニアは自分の胸を見た。

（サイトはルイズが認めたらわたしの事だって愛してくれる。サイトはわたしのむねが大好きだから間違いないわ。それに言い事を思いついたの。シエスタやタバサだってわたしの提案に乗るはずだわ。今のままではサイトはルイズしか選ばないだろう。二人がこの現実を甘んじて受け入れるはずがないから）

ティファニアは今日のうちにさっそく行動することにした。

シエスタとティファニアは普段は引込み思案であるが二人には危機感があつた。このままでは才人と別れざる得なくなる。自分は才人なしで生きれるのか？彼女たちはそれが座して待つよりと勝負に出たのだ。今、彼女たちに送る言葉があるとしたらこの言葉が適切だろう。

『勇気が！常に勇気が！さらに勇気が必要なのだ！』

「ジョルジュ・ダントン」

「おはようございます。サイトさん」

「おはよう、シエスタ。今日は何時もより早いね」

才人がシエスタが何時もより早いのに驚いた。何か嫌な予感がしていた。

（もしかして、タバサに日本語を教えていることを疑っているのか？でも特にやましいことはないし）

「サイトさん、今日はお願ひがあるのです。デルフさんとご相談したいことがあるんでお借りしていいですか？朝の授業が始まる前に必ずお返ししますから」

才人は嫌な予感がこれだと確信した。だが特段やましいことはないし、何かを問われれば堂々と言え言ひ事。悪いことは何一つないのだ。

「わかった。いいよ」

「ありがとうございますう。サイトさん！」

シエスタはお礼を言ってから水が入ったコップを差し出した。

「ありがとう」

才人は何の躊躇もなしに水を飲み干した。そして、ものの数秒も立たないうちに才人は椅子に座り込み眠りについた。

（さあ、シエスタ。始まりよ。今のあなたにとって砂時計の砂粒1つ1つが金貨一枚より重要よ）

シエスタはデルフリンガーを握るとルイズの元へと走って行った。

「タバサ、あなたに話があるの」

タバサは、ティファニアに呼び止められた。

場所は食堂につながる階段である。今日も才人と一緒に日本語の勉強を終えたタバサは機嫌よく階段を降りていたところにティファニアに呼び止められたのだ。

「ここじゃあ、他の人に聞かれたくないから、まだ朝食の時間まではあるからヴェストリの広場でお話しませんか？」

タバサは頷くと二人は、ヴェストリの広場に向かった。

「あなた、最近サイトの部屋で何しているの？」

「あなたに答える必要はない」

タバサは、ティファニアの質問に善人相手に気が引けたが撥ね付けた。

「別に答え次第でルイズに言うつもりはないわ。わたしもあなたと同じ立場だから」

ティファニアの言葉にタバサが片眉を上げた。

「わたしもエルフにさらわれてからサイトに何度も助けられた。わたしもサイトのことが好き。でもルイズとサイトの間に入る事は出来ない。あなたもそう思うでしょ。いや、あなたはその事をわたしよりもわかっているはずだわ」

「・・・あなたには関係ない」

タバサは内心気付いていたことをティファニアに指摘され動揺を隠せないでいた。

「じゃあ、朝、サイトと過ごしている時が一生続かなくとも週一だけでもあったらいいと思わないの？」

タバサにはティファニアに抗う力は残っていなかった。

「あなたとシエスタさんとわたし。三人が力を合わせないといけないと思うの。同盟して王朝に^{ダイナスティ}対抗しなきゃいけないの」

タバサは才人の部屋を見ながら頷いた。そこには、妙な服をきたシエスタが窓際から様子をうかがっていた。ティファニアもそれに気付いた。

「その前に抜け駆けは止めないといけない」

タバサの言葉にティファニアも頷いた。

第3話 「勇気が！常に勇気が！さらに勇気が必要なのだ！」（後書き）

次回 三帝会戦じゃなくて四帝会戦？ 才人は蚊帳の外！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4012n/>

もし、トリステイン魔法学院に《漫画 ナポレオン～獅子の時代～》の単行本

2010年10月26日19時40分発行